

# スカンジナビア最古の大学街、ウブサラ

すぐる  
傑  
くち  
口  
いの  
井

(本塾大学医学部専任講師)

## はじめに

塾でも屈指の古い建物の廊下で、「先生、スウェーデンに留学したんだったね」と先輩から話しかけられた。「先生、ウブサラをご存じですか」と問われ、「はあ」と言いながらストックホルムから通ったウブサラ大学の光景を思い出している内に、「三田評論に世界の大学街という題で書いてください、編集の方に電話しておきますから」と頼まれてしまった。

## ウブサラと私

私が日瑞基金の派遣留学生としてスウェーデンに滞在したのは一九七七年から約一年半で、ストックホルム大学の医学部であるカロリンスカ研究所の整形外科部門のノルバックカ研究所に籍を置いていた。その間、ウブサラ大学の大学病院で手の外科の実習に一月、工学部で赤外線発光素子による遠隔計測の研究に一月と合計二月、

ストックホルムのアパートから自動車通勤した。当時、私の留学先の主任教授で、後に母校であるウブサラ大学に戻ったスベン・オレルド教授に相談したところ、ウブサラ郊外の自宅からストックホルムの病院まで自動車で約三十分ちょっとのところ、教授に習い自動車で通うことにした。ところが、一時間も前にストックホルムを出発したにもかかわらず大幅に遅刻してしまった。ノーベル賞の医学部門の審査委員でもあり、長身瘦軀の穏やかな紳士であるオレルド教授が実は時速二〇〇kmも辞さないとばし屋であることは後で知った。

## 古き都、ウブサラ

ウブサラは人口十五万のスウェーデンで四番目に大きな都市である。首都ストックホルムの北六六kmに位置し、そのほぼ中間に表玄関であるアーランダ空港がある。ウブサラはバイキングの時代から宗教的な中心地であり、古

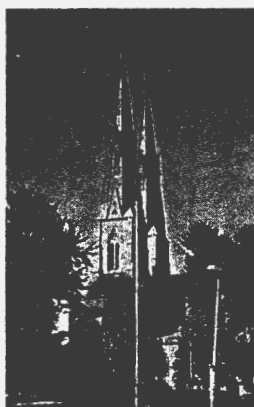
## 世界の大学街

き北欧の神々に動物ばかりでなく人間さえも生け贄に捧げられた場所である。キリスト教が伝来してからも、八百年の永きに渡ってスウェーデン教会の大神の座が置かれていた。そして、ウプサラのもう一つの顔がウプサラ大学であり、何世紀にも渡って研究が続けられている。

### ウプサラ大学の歴史

ウプサラ大学は一四七七年にスウェーデンの大神教であるジャコブ・ウルソンにより創設された。大神教はローマ法王の認可を得たうえで、スウェーデンに総合大学を設立する国の支援も獲得した。それまでは、学生が高等教育を受けるためには外国に留学するしか道がなかった。揺籃期における大学の存立はカソリック教会に依るところが大きく、聖職者の教育に重きが置かれ、大学の建物は大堂の近くに建てられていた。ウプサラ大学はスウェーデンにある六つの総合大学の中で

も最も古い総合大学である。キリスト教会の最北の辺境であったウプサラに創設された総合大学として、当時のフランスやイタリアの総合大学と同様に神学、法学、医学、哲学の学部を持ち、特に神学と哲学には力が入れられていた。初期における大学の発展は遅々としたもので、教会は宗教改革のためその責任を放棄してしまい、一五一四年から一五九三年まで、大学の活動は中止されていた。大学の基礎が国際的水準に達するには十七世紀まで待たねばならず、その再興は主にグスタフ・アドルフス国王（一五九四—一六三二）に依るところが大きい。また、国



王に影響力を持つ大学の総長ヨハン・スキッテ（一五七七一—一六四五）と熟練の教授オロフ・ルドベック（一六三〇—一七〇二）の尽力も重要であった。ウプサラの大部分を焼き払った一七〇二年五月の大火は、再び大学の活動を著しく阻害した。しかし、この大きな不運にも関わらず、十八世紀は最も有名なカール・ボン・リンネを始めとする輝かしい科学者を輩出し、大学の繁栄した時代でもあった。ウプサラは一八五〇年まで人口三千の小さな地方都市に過ぎず、わずか八百人に過ぎない学生数にも関わらず、街の印象は学生が支配的であった。

ウプサラ大学は創立以来、常に公立大学であり、今日、スウェーデンには私立大学はない。これは、スウェーデンでは学生が授業料を払う義務がないと言うことである。一九五〇年代から一九六〇年代にかけて学生数は五千五百人から二万四千人に急増した。勿論、この過程において多くの問題が生じ、

教育と管理の両面で解決されねばならなかった。一九七〇年代の始めには大  
学は新たな転機を迎え、入学者の数が  
減少し、登録した学生数も同様に減少  
した。一九七三年には大学生の数は二  
万二千人に減り、これは不況で学生に  
適した職場が少なくなつたためと思わ  
れる。しかし、それで教育や研究に関  
する活動が低下したわけではない。科



ウプサラの大学街

学の分野での多くの集中的な活動が継  
続され、現在でも大学は神学、法学、  
医学、薬学、教養、社会学と自然科学  
の七学部を有している。

#### ウプサラの街並み

##### 〈ウプサラ大聖堂〉

ストックホルムから高速道路E4で  
約六〇kmほど北上する。ウプサラの郊  
外で左折し中心地に向かい、中央駅の  
北で鉄道をくぐり、市を二分するフィ  
リサン河を渡ると、直ぐ右手に大聖堂  
が見える。古ウプサラにあった大聖堂  
は一二四五年の大火で焼け落ちた後、  
一二五八年アレキサンダー四世法王の  
認可を得て約三マイル北にある現在の  
ウプサラに移転することになった。十  
三世紀末に始まった大聖堂の建築は約  
一五〇年かかって一四三五年に完成し  
た。この大聖堂は完成時、スウェーデ  
ン最大の教会であったというばかりで  
なく、現在でも最大の教会である。し  
かし、これで建設が終了したわけでは

なく、その後も火災により塔が倒れ、  
内装と共に再興されている。一九七六  
年の聖霊降臨祭には五四一年ぶりに完  
壁な修復が行われ再開された。新たに  
修復された大聖堂はその広さ、形の清  
純さ、絶妙な細部に互る装飾、バステ  
ル調の軟らかな陰が生み出す優雅に調  
和のとれた色調の音階が印象的であ  
る。北の塔にある博物館にはヨーロッ  
パでも有数の教会の織物と金銀の祭器  
のコレクションが納められている。

##### 〈グスタヴィアヌム〉

大聖堂の正面に面して一六二五年に  
建てられ、その後一八八七年までウプ  
サラ大学の本館であったグスタヴィア  
ヌムがある。グスタフの遺産と呼ばれ  
る四百もの農場を大学に寄附し、その  
後二百年余に亘って大学の経済的独立  
に寄与したグスタフ・アドルフ国王を  
記念して名付けられた。その中央には  
特徴的なキューポラ型のドームがあ  
り、その中には二百人が一度に入れる  
階段教室がある。解剖室として使われ、

## 世界の大学街

動物ばかりでなく人体の解剖も公開されていた。この建物を挟んで大聖堂と向かい合うように建っているのが一八八〇年代に建てられたネオルネッサン様式の現在のウブサラ大学本館である。この新しい本館はその見事な玄関、二千人を収容する講演の為の巨大なホール、多くの教室と会議室を擁している。学長の間には一六三二年にアウスブルグ市からグスタフ・アドルフ二世に贈られた有名な飾り戸棚が納められている。

### ヘカロリナ・レディヴィヴァン

道の突き当たりにはスウェーデンで最大、最古のウブサラ大学の図書館であるカロリナ・レディヴィヴァンが見える。一八一一年カール・ヨハン皇太子はウブサラを訪れ、大学の管理者を連れて市内を見て回った。それまで、書籍や原稿のユニークな蒐集が湿っぽい部屋に積み上げられ危機に瀕していた。もっと大きな建物が図書館として緊急に必要だった。大聖堂とお城に挟

まれた高台に着いたとき皇太子は「こここそ探していた場所だ」と言い一八四一年、そこにカロライン記念と命名した図書館を建設した。今日、この図書館はスカンディナヴィア最大の図書館であり、二百万冊を超える蔵書を誇っている。

### ヘウブサラ城

大聖堂の横で道を左に折れると、右手の高台に赤いウブサラ城が見える。この城はグスタフ・ヴァッサ王により一五四〇年代始めにこの高台に建てられた。この城の建設はその優雅な外見とは裏腹に、スウェーデンの歴史でも最も劇的な時代の極めて高度な政治的意味合いを持っていた。当時、グスタフ・ヴァッサ王はローマ法王とカソリック教会から絶縁した。しかし、人々は信仰を変えず、カソリック信仰は生き続けその力は侮れないものであった。その上、中世の司教は必要とあらば剣を手にするのに躊躇しなかった。そして、ウブサラ大聖堂こそ正に

ローマ法王の象徴であった。そこでグスタフ・ヴァッサ王は大聖堂を見下ろす高台に要塞を築き、そこから大砲で大聖堂に向けた。教会は押さえ込まれ、高台の要塞は王権のシンボルとなった。その後ウブサラは王様の街となり、大聖堂で戴冠式を行い、城でその祝いをするのが習わしとなった。しかし、ウブサラ城は一七〇二年の大火により廃墟と化した。一七五七年には外観は今日見られるように修復されたが、内装は県知事の住居として改装された。ハマーシヨルド国連事務総長が育ったのはこの館である。

### ヘウブサラ大学病院

ウブサラ城を外れると、大学病院地域の北口に達し、ここには一八六七年に建てられたピンク色の外壁を持つ病院最古の建物がある。この奥には最近数十年間に建てられた医療のための巨大な建物群が連なっている。この病院はアカデミック病院と呼ばれウブサラで指導的な病院で、最古の病院である

ばかりでなく、ウブサラ最大の雇用の場でもある。現在の病院は一八六〇年代にウブサラ城の直ぐ南の場所から出発して南に拡張されていった。このアカデミック病院はウブサラの公立病院であり、この地方の指導的な病院であるばかりでなく百九十万人の人口を擁するエレプロ地方の地域病院として活躍している。その上、毎年二百名からの医師を含めて千五百人も医療関係者の教育、研究病院として活躍している。

#### 〈古ウブサラと三つの丘〉

ウブサラには短い春、夏、秋に長い冬がある。雪の残る草原に色とりどりの花が咲く春、夏至祭を中心とした緑萌える夏、あつという間に木の葉が散って急に窓からの見通しが良くなる秋、いずれも素晴らしい季節であるが、やはり長く厳しい冬がウブサラの真の顔であろう。北極圏に近いウブサラでは、冬の日の出は遅く、日暮れは早い。

午前中の手術を終わって手術場の窓をふと見ると赤い弱々しい夜明けの太陽が見える。昼食を終わって医局で一服していると早くも日が暮れていく。自動車ヘッドランプはエンジンをかけてれば何時でも点灯するのがスウェーデン式である。油断してエンジンルームに電熱を入れずに屋外に駐車しておくとうエンジンオイルが凍ってしまう。雪の降り始めには砂と塩を撒いて凍結を防いでいる道路も、数十センチの青氷で覆われ、スノータイヤをスパイクだらけにして運転しなければならぬ。こんな雪と闇に閉ざされたウブサラの冬も、夏に遊ぶために冬働く土地っ子を閉じ込めることはできない。十二月の始めの聖ルシア祭(サンタルチア)からカウントダウンが始まるクリスマス、新年が過ぎ、イースターが近づくと、太陽の出ている時間も長くなり、戸外に出てスキー、スケートを楽しむ人が増える。

ウブサラから南に直線で約三マイル、フィリス川を遡ったところに古いウブサラがある。この古ウブサラには五世紀から六世紀に作られた三つの大きな古墳と十二世紀に建てられた大聖堂がある。冬の短い昼の冷たく抜けるような青空をバックに白く輝く氷の墓は荘厳である。この荘厳な古墳も遊びの場の少ない子供達にとっては巨大な遊園地、滑り台である。赤や青のキルティングにくるまった子供達が歓声を上げながら滑り落ちてくる。白い息を吐きながら、何度も何度も登っては滑る子供達の歓声は地下に眠る古代の王様の耳に届いているのだろうか。ふもとの小屋でコーヒースずりながら、妻と二人、何でも幻想的に歪めてしまふ古い小さな窓ガラスを通して、金髪の子供達に混じって滑り降りてくる黒髪の娘を探していたのが昨日のこのように思い出される。

## 清酒リキュール

こうそけんぞう  
高祖淳三

私の住む牛窓は、岡山県の東南端、南に小豆島、東は播磨灘に面し、万葉集にも歌われている気候の温暖な港町です。昭和五十年代からリゾートホテル、ペンションといった宿泊施設も増え、「日本のエーゲ海」のキヤッチフレーズのもと、主に京阪神からの観光客で賑わうようになりました。この牛窓の地で、備中屋・高祖家は創業三百年、私が十二代目で今日に至っております。

九年前より当社の清酒「千寿」にライムをブレンドした「サム



ライ」、クラ  
ンベリーをブ  
レンドした  
「ピンクロッ

ク」を製造・販売しておりますが、フルーツ王国・岡山の名産品と清酒をマッチングできないものかと研究を続けておりました。こうした中、一昨年より岡山産・白桃をブレンドした「白桃酒」を発売し、牛窓はもとより、岡山駅、空港、倉敷美観地区等でも販売し、フルーツ王国・岡山のPRに一役買っております。また、昨年は白桃と並ぶ名産品のマスカットをブレンドした「マスカット酒」、今年新たに名産品として売り出した「マスクメロン」をブレンドした「メロン酒」を発売しました。いずれも、素晴らしい香りと爽やかで心地よい余韻が楽しめる本格派リキュールです。

今後とも、伝統産業である酒造りを伝承するとともに、新商品の開発にも前向きに取り組んでいきたいと思っております。

(高祖酒造・塾員)

## ロンドンにて

なとりじんこ  
名取純子

異国へ旅をすると日本では決して目にするのではない光景に出会うことがある。

夏の終わりに友人と二人でロンドンへ旅をした。ある朝公園を散歩していたときのことである。前日までの晴天とうたってかわり、吐く息が白くなる程肌寒く雨も降り出した。そんな空模様で平日の午前十時頃、人影はまばらだった。秋を通りこして初冬の天気だね、などと言いつつ

いながら公園中央にある池の脇の道を歩いていると、突如目の前のポートハウスのようなところから中年男



ろから中年男性が現れた。皮ジャンを着て通り過ぎる

人もいる程の気温の中、その男性は海水パンツ一枚。あっけにとられた私達に追いつくのをかけるように、後ろからその男性の妻らしき中年女性がやはり水着姿で現れた。足をとめておそるおそる振り返ると、ポートがかび雨の打ちつける水面めがけて勢いよく飛びこむ中年夫婦の姿がそこにあった。イギリスには伝統的に冷水で心身に鍛えるという教育方法があったと聞いたことはあるが。日本の公園内の池ならおそらく遊泳禁止であるのがイギリスでは全て個人の責任に任せられる、ということなのだろう。

誰にとがめられることもなく寒さに羽をふくらませる水鳥たちと一緒に泳ぐ夫婦を背にして再び歩きはじめると、水面を打つ雨が、「コジンシュギ」と音をたてた……ような気がした。

(サンケイ会館・塾員)